

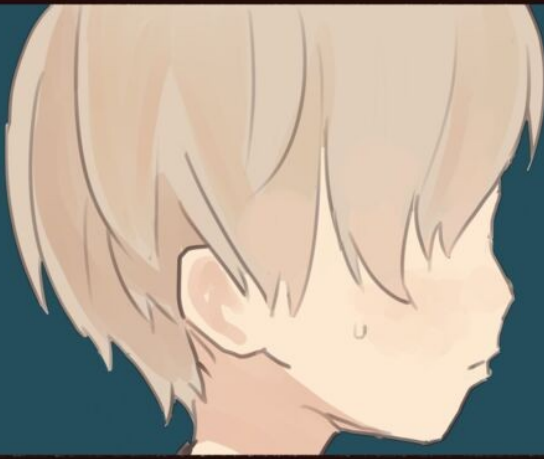
私の名前はヴァミリオ・ミズ
広大な地を治めるミズ家の一人娘。

今夜も使用人を部屋に呼び出すと
ひっそりと"それ"を始める





私がこう言うとアルファはいつも黙る。
そしてこれがはじまりの合図でもある



……
かしこまり
ました……

お父様もお母様も嫌い。
私を家に閉じ込めて……



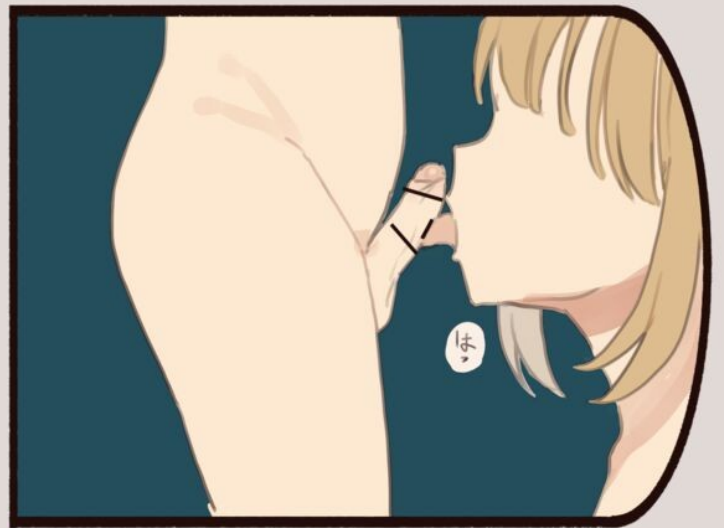
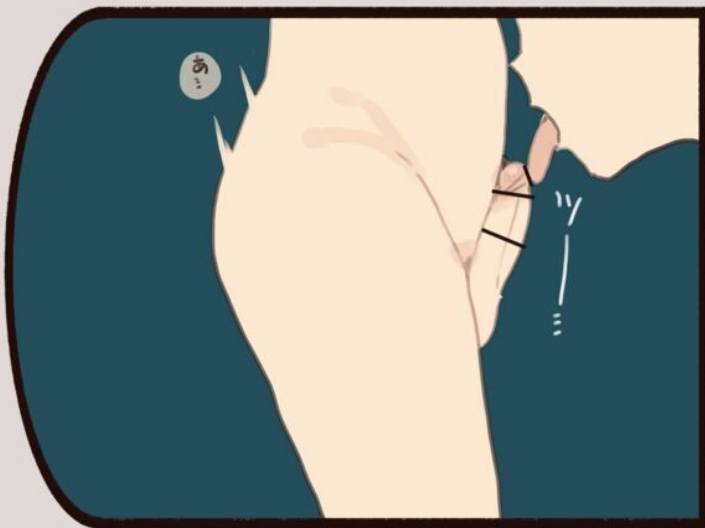
心を許せるのは
この子だけ……





ああ…その純粹な瞳

あなたはなんで可愛いんでしょう



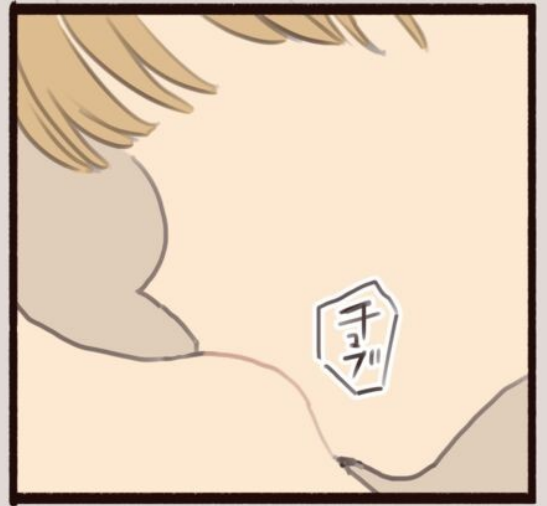
両親への反抗。この関係はその^{ふんまん}憤懣をぶつけるかの
ように生まれた、歪んだ秘密だった。

私は吸いついた。
私の言いなりになるこの子の
か弱く柔らかい肌に。乳首に。

そして
無垢で従順な心を
犯していった。

私より弱い存在
愛しい……
アルファ…







一方的な愛情で
行われる男女の契り。

しかし
本人の意思とは別に
アルファの体は
明らかに
喜びを感じていた。

そのか細い嬌声を
聞くたびに私が
満たされていくのを
感じる……

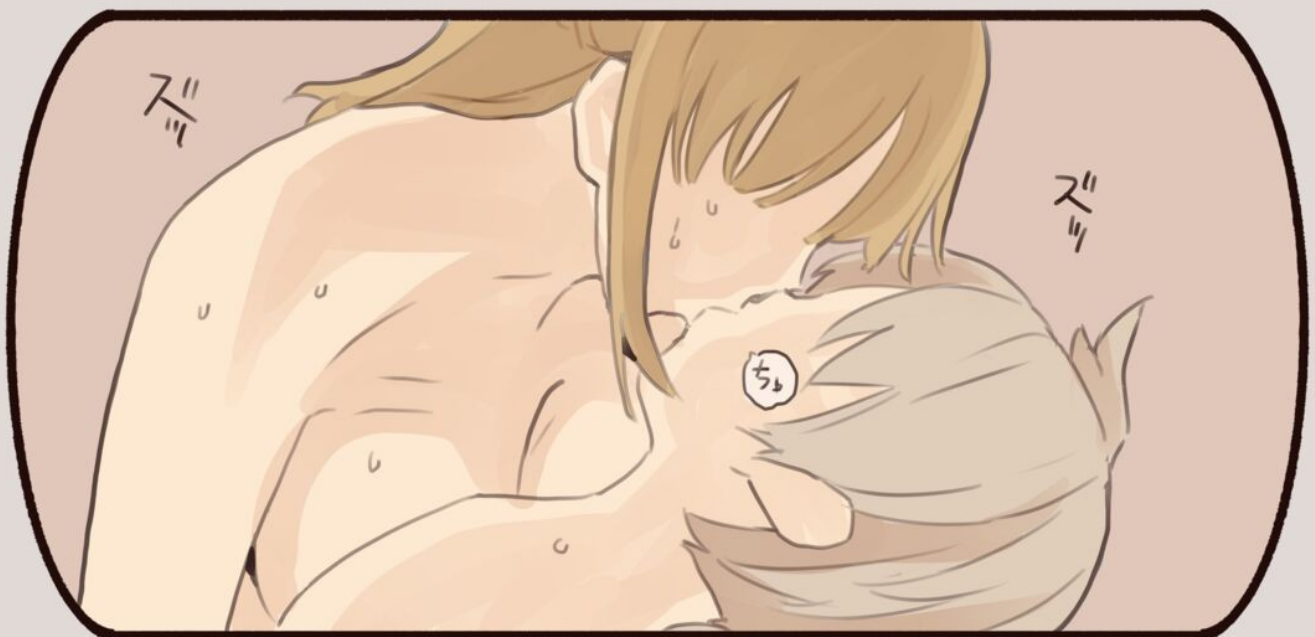
あっ

はっ



貴方は何を考えているの？アルファ……
戸惑いつつも健気に従い
許されない行為に身を染める可哀そうな子。

私は知りたい。
貴方の透明な罪悪感を。
快樂と、その胸の内にある葛藤を……






僕の名前はアルファ。

この家の使用人だ。

お嬢様の名はヴァミリオ・ミズ
広大な地を治めるミズ家の一人娘。

お嬢様は僕を部屋に呼び出すと
毎夜"誘惑"をする……

高潔な血にかさわしくない穢れた行為。
なぜそうするのはわからない。
だけど……僕はただお嬢様に従う。



呼び出した
理由は
わかるわね



お嬢様にこう言われると僕は黙る。

なぜならこれは形式だけのやり取りだから……



……
かしこまり
ました……

僕はズボンを下ろした



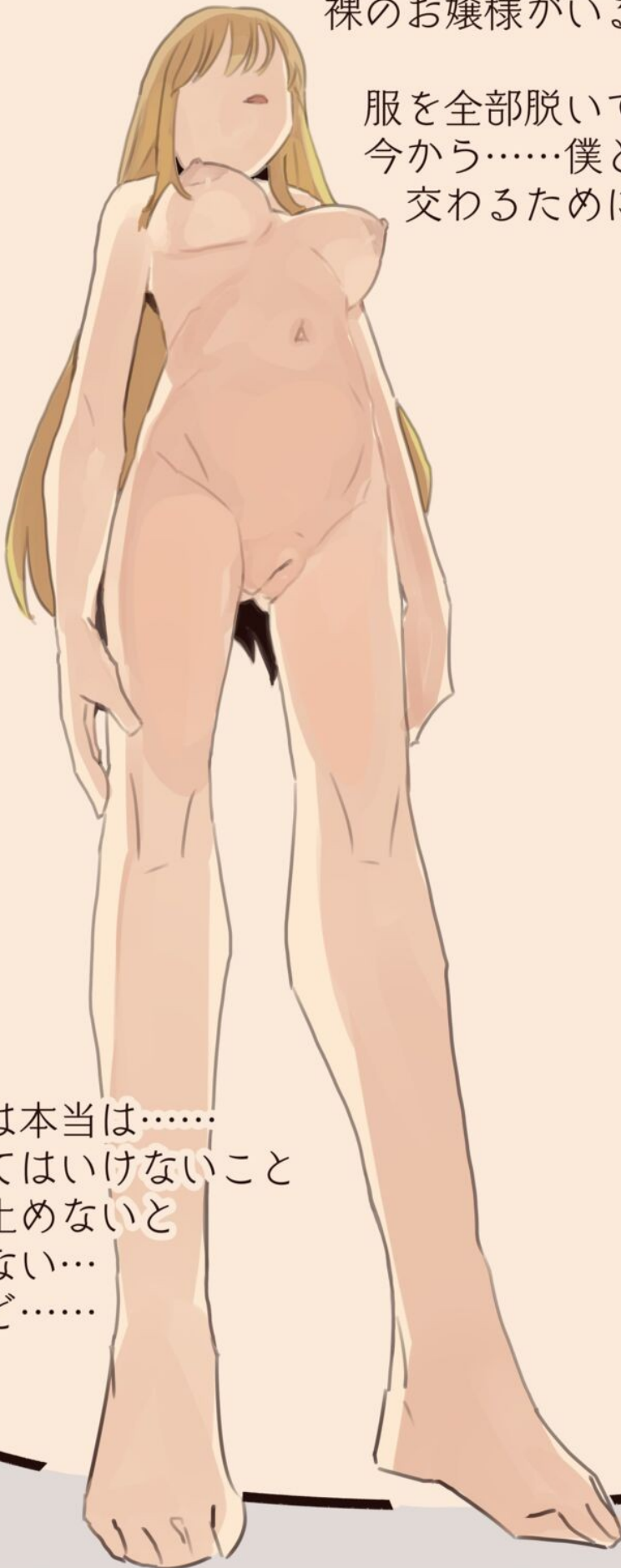
ゆっくりと
静かに……

また……
今日も……

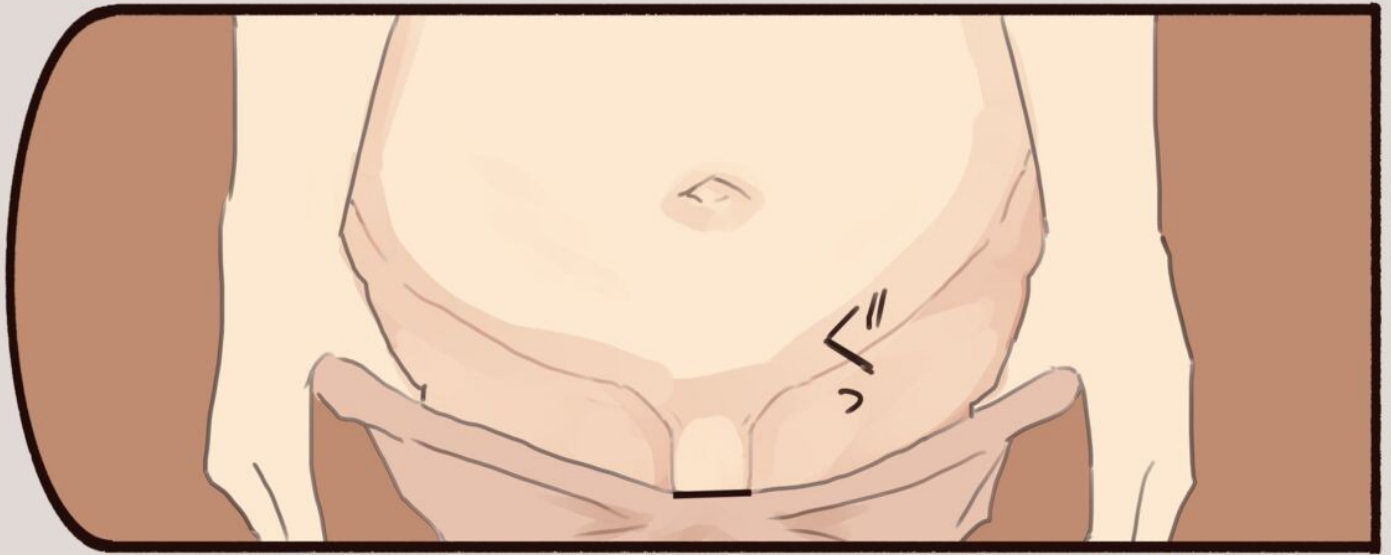


顔を上げると
裸のお嬢様がいる

服を全部脱いで
今から……僕と
交わるために



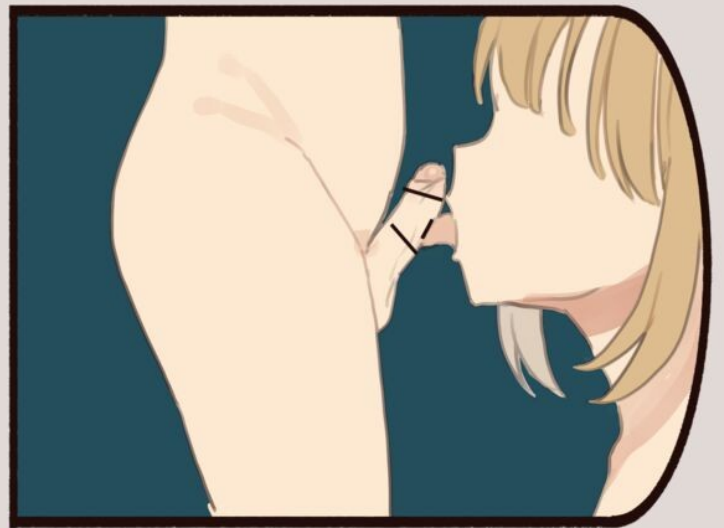
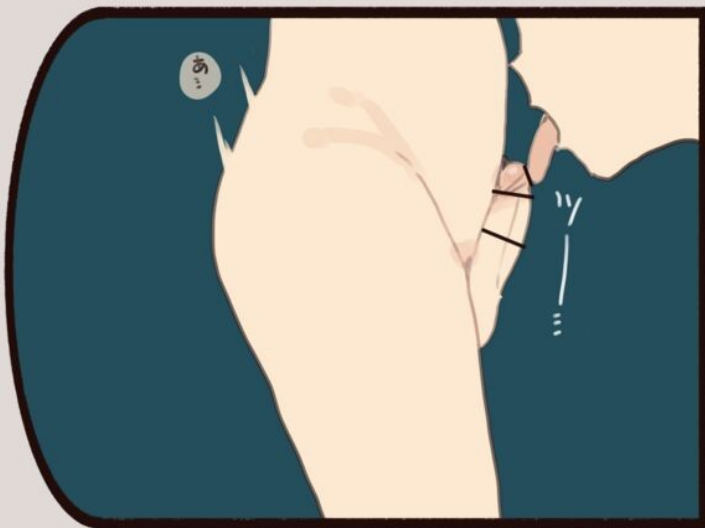
これは本当は……
あってはいけないこと
僕が止めないと
いけない……
だけど……



僕は止めない……
だって本当は僕は……

"これ"がいつも楽しみだから。

アハハ
アハハ



僕は……卑怯な人間だ。
罪の意識を感じている素振りを見せながら
本当は待ち望んでる。

気持ちよくなりたい。
お嬢様とキスがしたい。
お嬢様とセックスがしたい。

それが僕の本音。
使用人の分際で
卑しい欲望を
お嬢様に向けて…





ある日お嬢様に
言われたことがある。
「純粹で無垢、そこが
あなたの素敵な所」と。

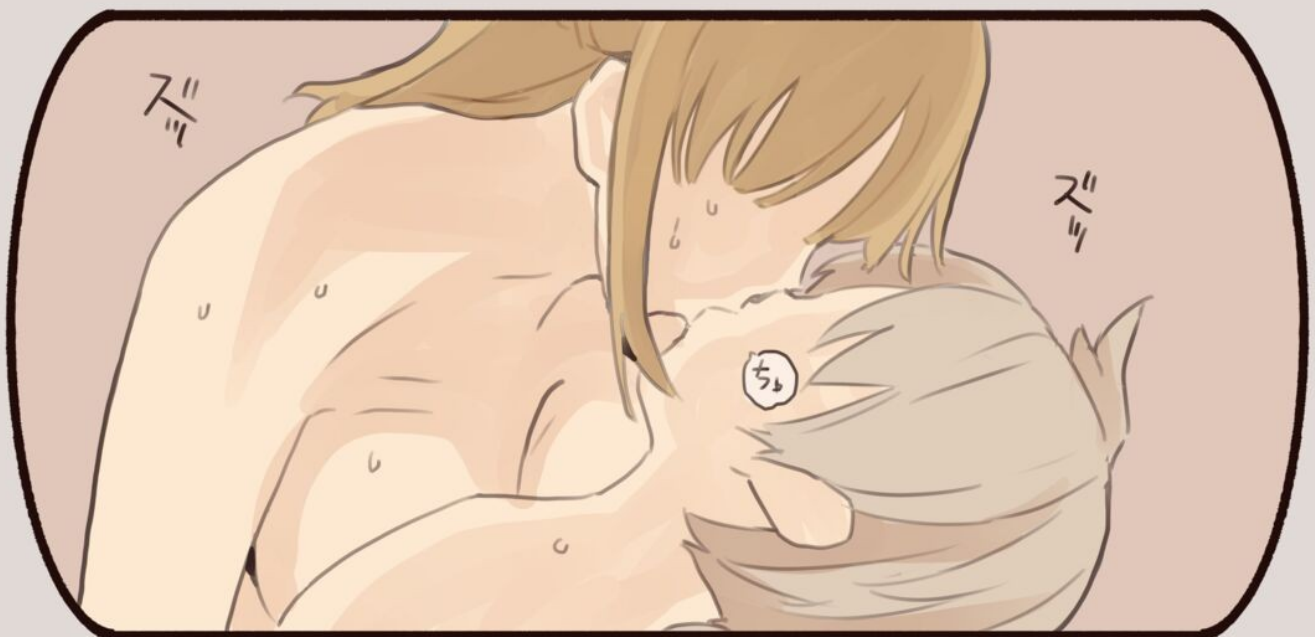
僕はそんな
人間じゃない……
僕の汚い心を
知るときっと
僕はお嬢様に
嫌われてしまう。



ごめんなさいお嬢様、僕は貴女の言うような

せいれん
清廉な人間ではありません。
貴女の間違いを諫めず、共に快樂を貪っています。
そして……そのことに罪の意識ではなく……

背徳感すら感じています。





どうか僕の心を 覗かないで……





目の前のおっばいに
しゃがりついた。



僕は考えるのを
やめて……

…そして



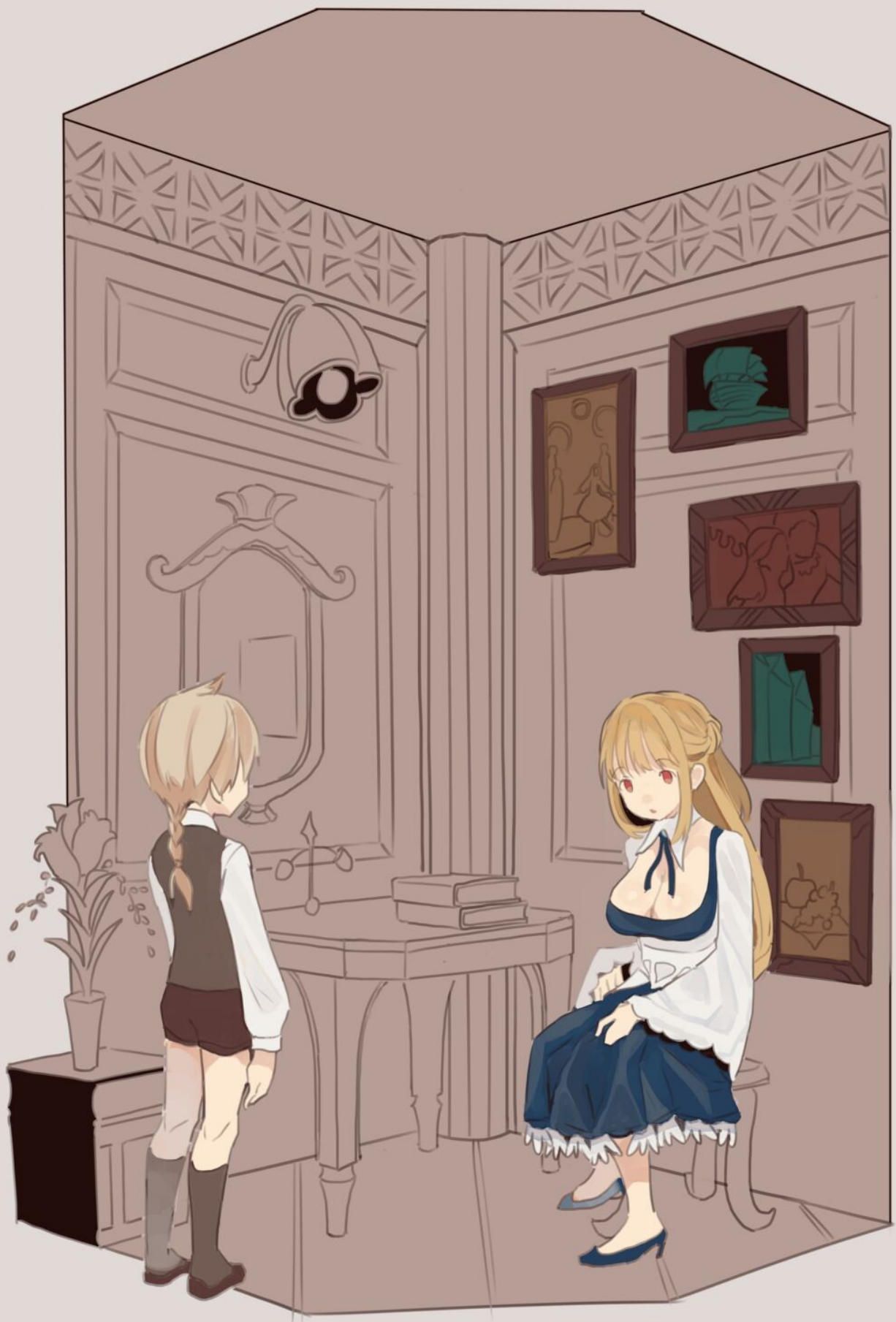
僕の名前はアルファ……

この家の使用人……

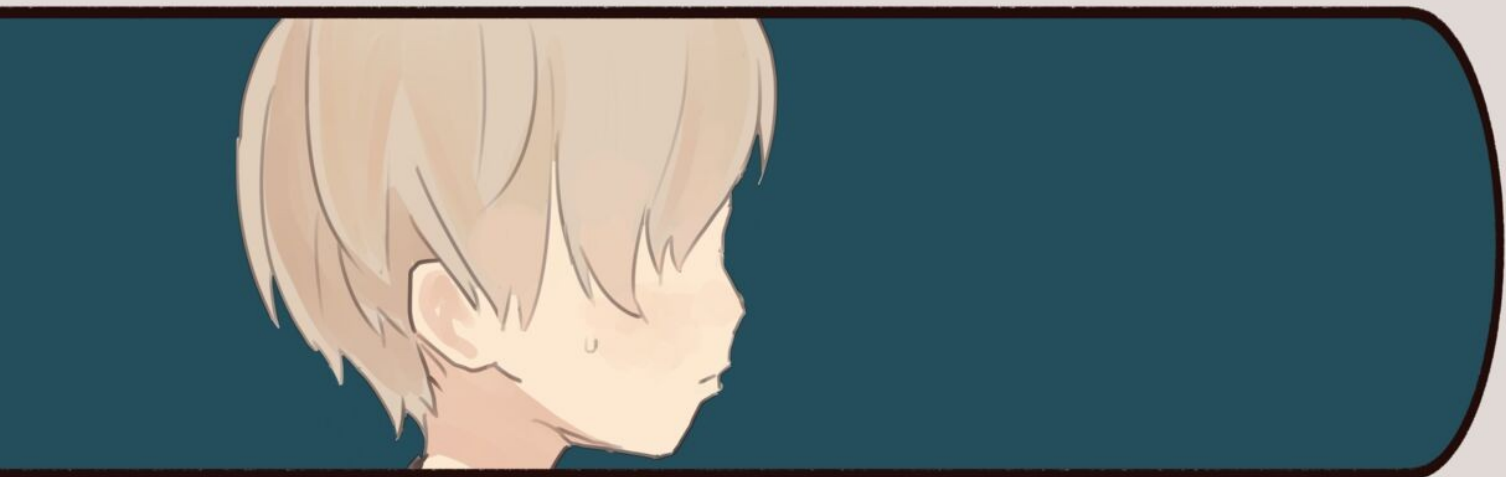
少なくともこの関係が、つづく限りは。

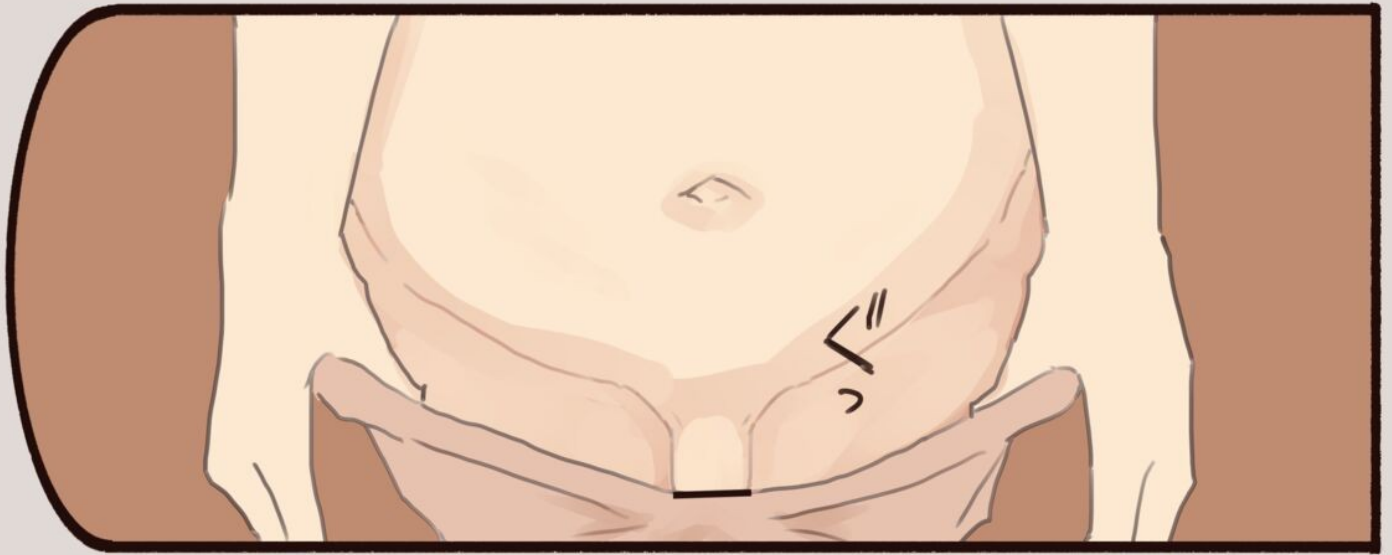
ぼくはお嬢様の夜伽役

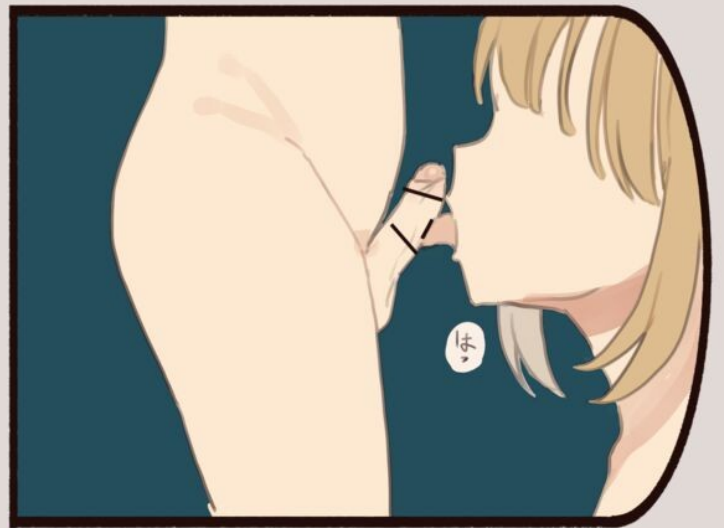
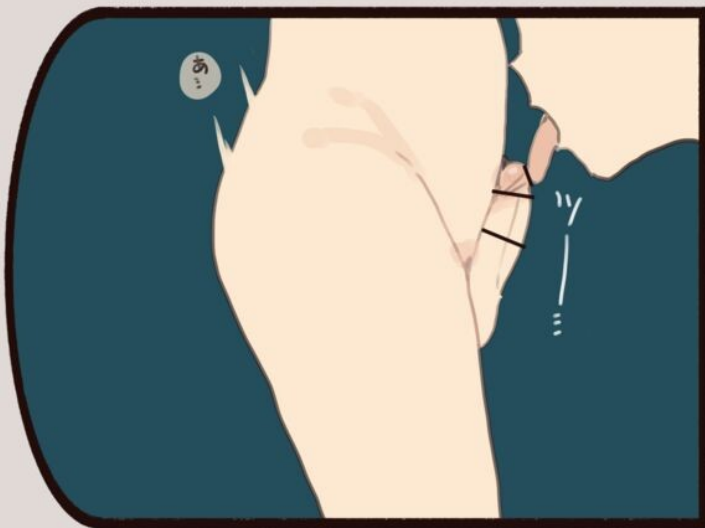
終











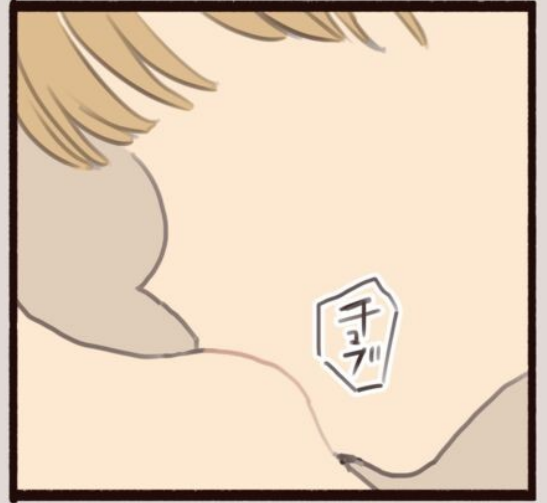


あ...

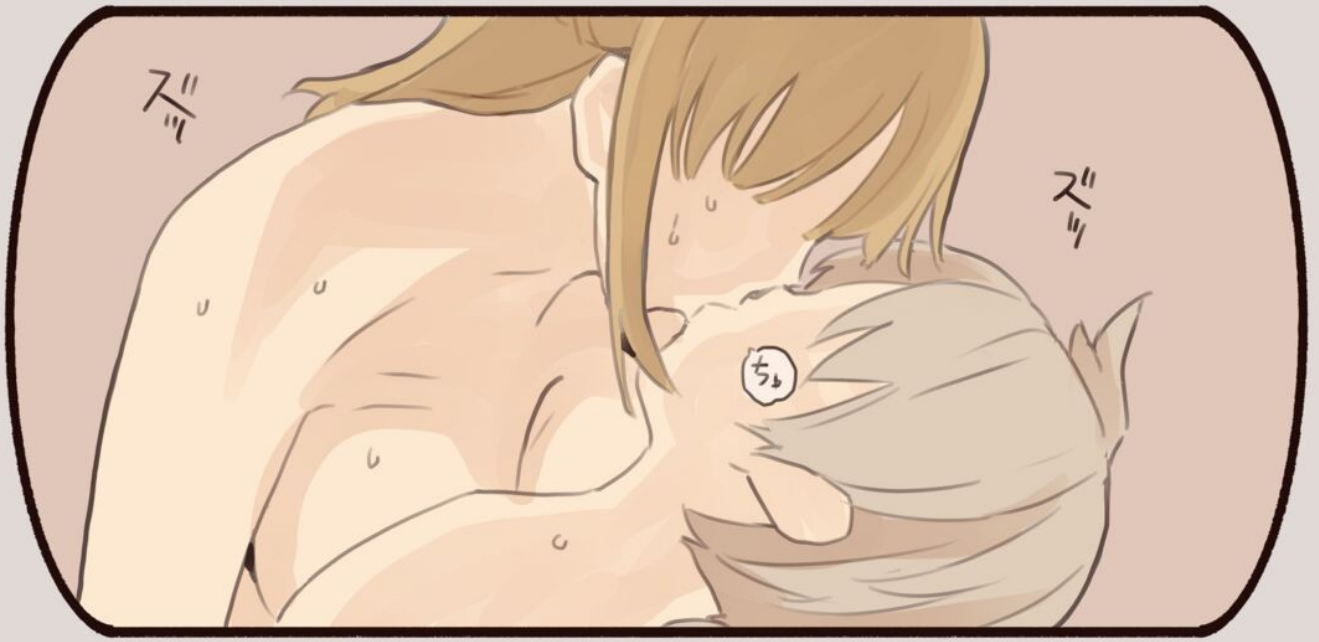
あ
あ
あ

あ

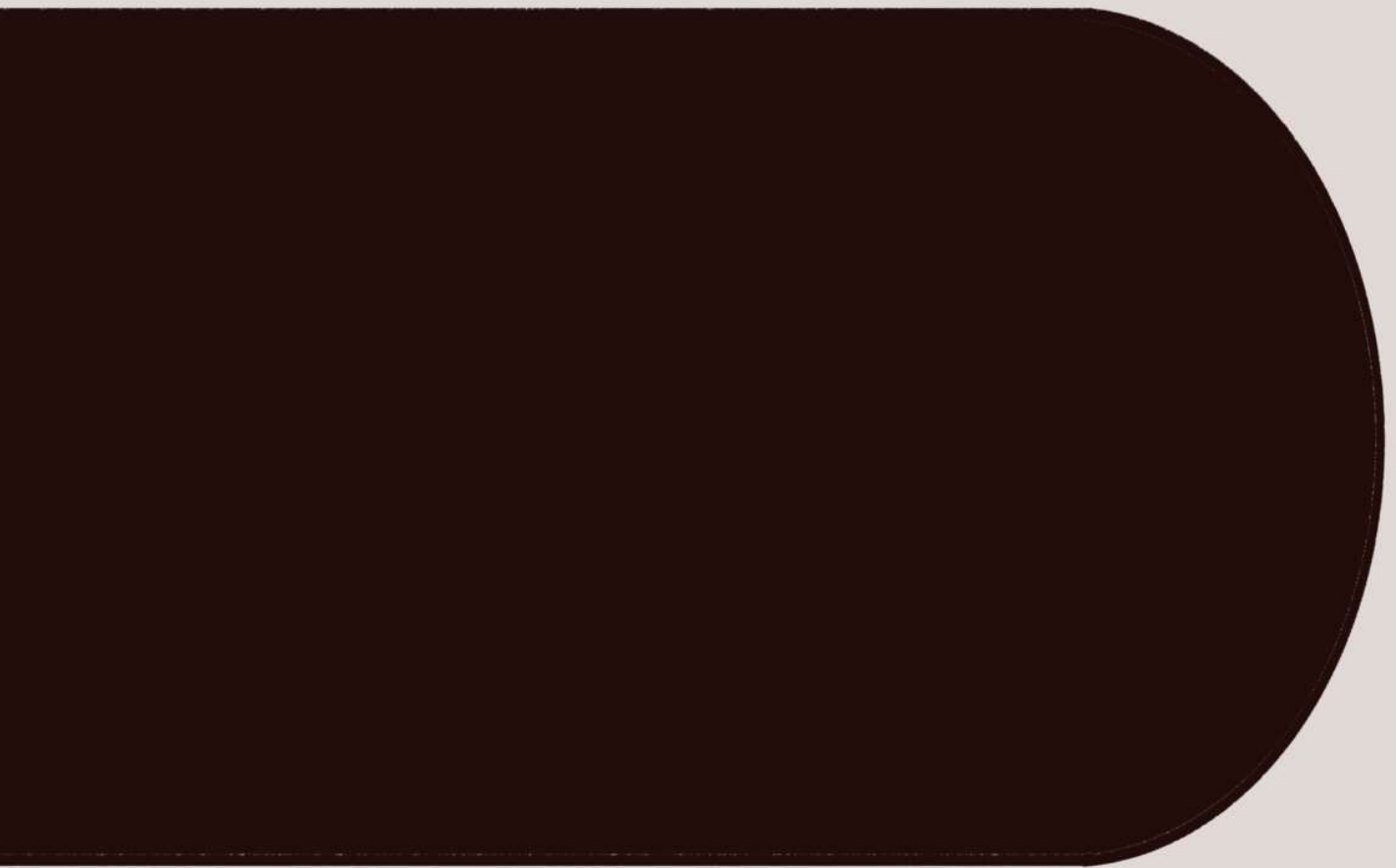
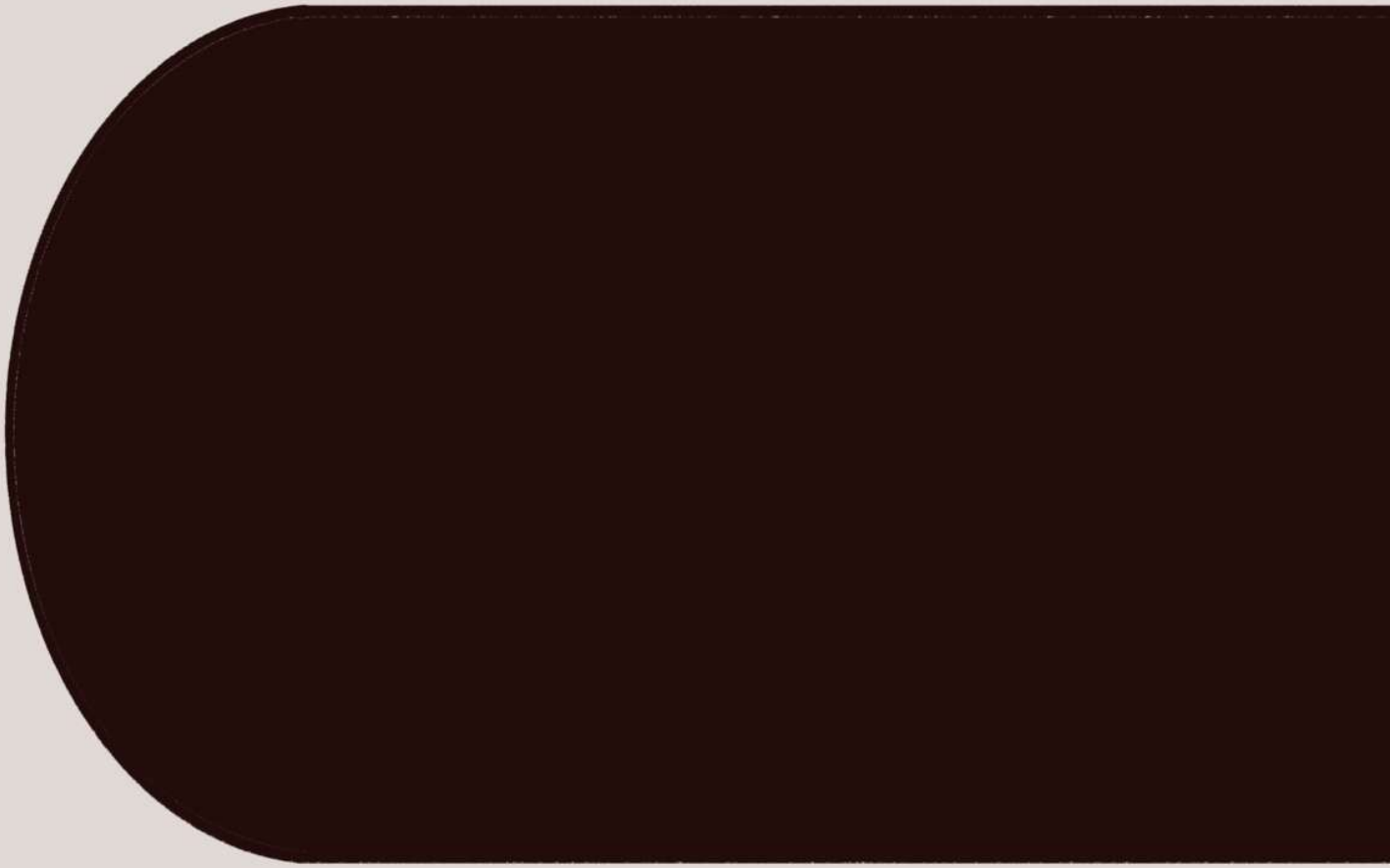
あ
あ
あ





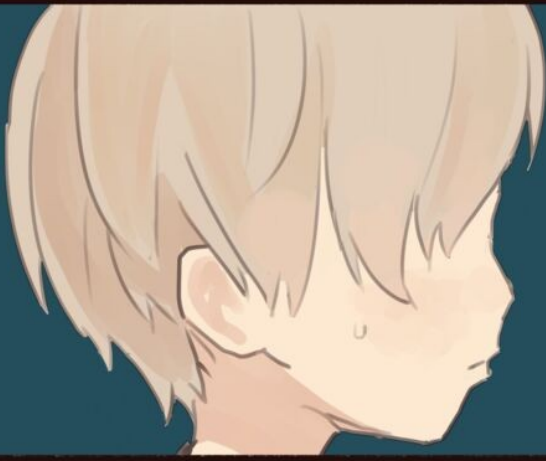




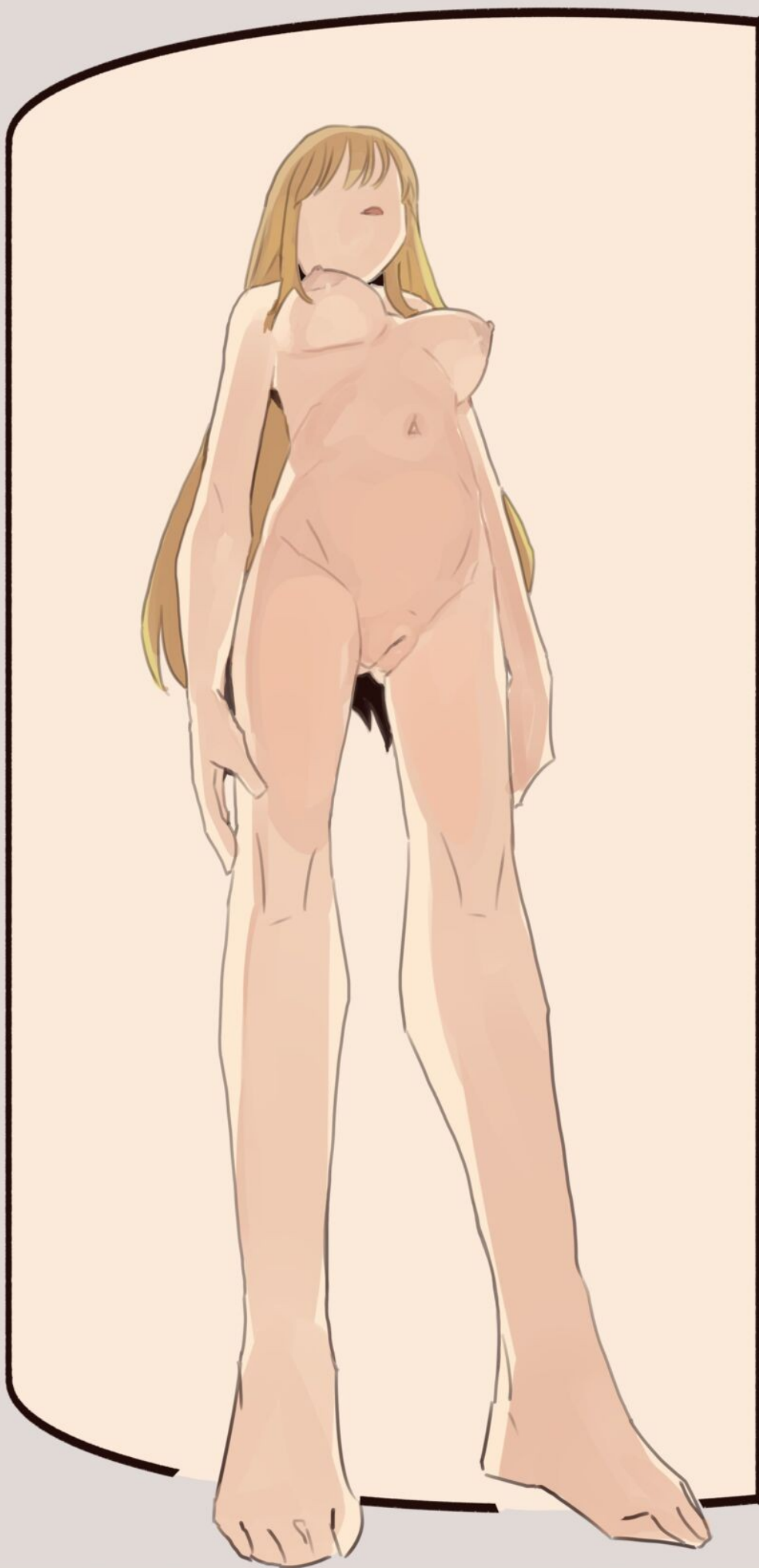


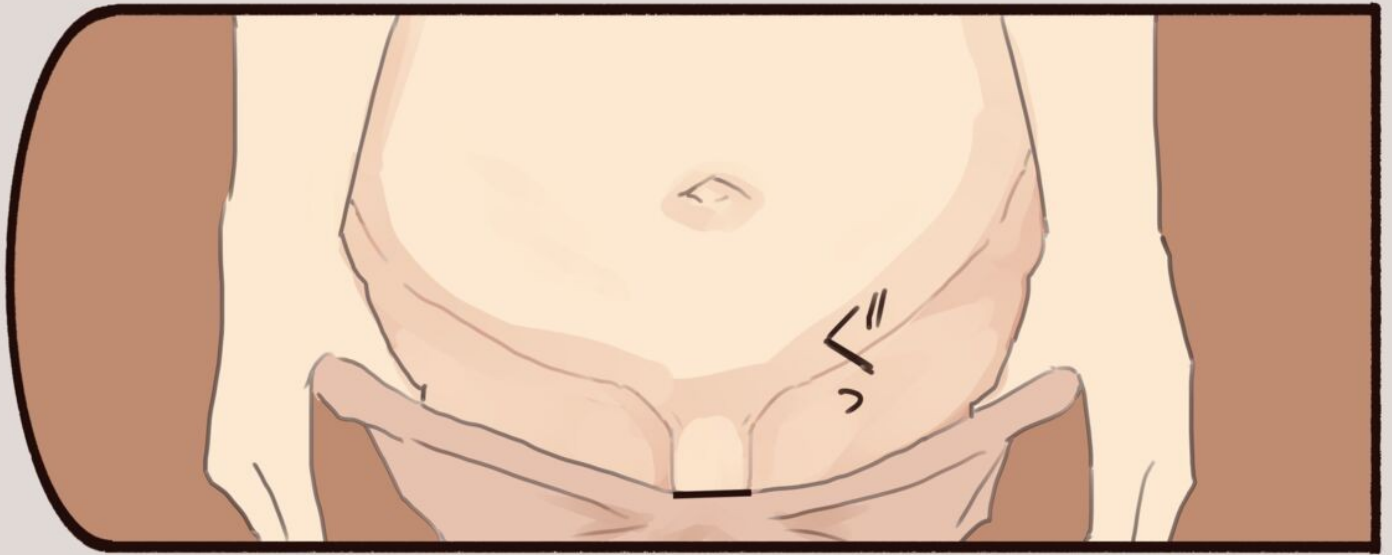


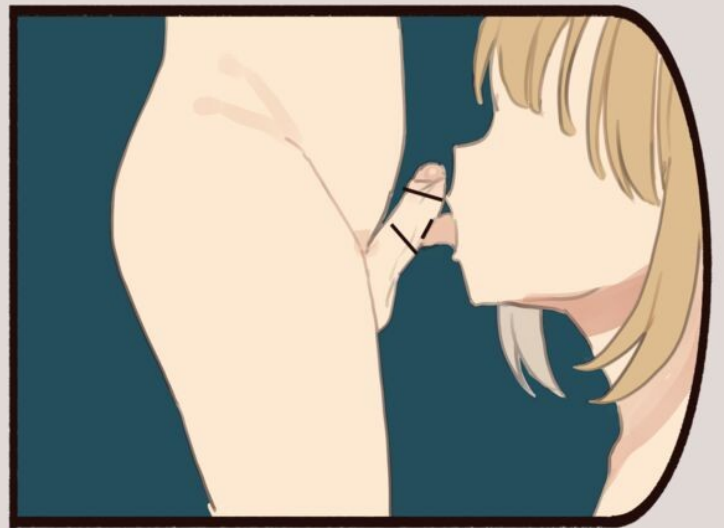
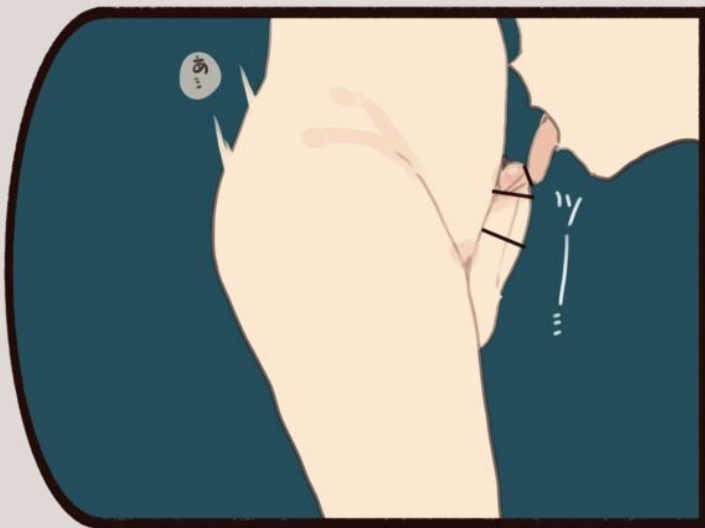




また...
今日も...









あ...

ちやい
ちやい

あ...

ちやい





